

2021年
6月

マナ通信



今月のマナ通信は、
◎4月の聖書日課（ルカの福音書、詩編）
◎土・日曜日の学び（イエスの復活、荒野の旅）からの感想です。

神は われらの 避け所 また力。苦しむとき そこにある強き助け。それゆえ われらは恐れない。たとえ地が変わり 山々が揺れ 海のただ中に移るとも」（詩篇46:1-2）

この力強さ驚きます。神に全幅の信頼を寄せて生きることは、実に楽しいことだと諭されました。神は我々を愛し、憐れんで下さるのです。なぜかと言えば、やはりこの御言葉を思い浮かべます。

「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」（ロマ1:16-17）

我々クリスチャンは「救われた者」なのです。どう言うふうに救われたかと言うと、それは神が、罪と死の支配の下に置かれていた人間を、神の御業を信じ、確信した者を義と認め、御霊といのちの支配する領域に移しかえて下さったのです。住む世界が変わったのです。

具体的にはアダムにあって罪ある自分はイエス様が十字架にかかれた時、一緒に十字架にかかって死にました。いや、罪の無いイエス様が自分の罪の為に死んで下さったのです。そして三日後、父なる神はご計画を見事成し遂げたイエスを死に値しないと復活させたのです。その時、自分もイエス様と一緒に生き返ったのです。救いの根源であるこの事は我々が当然実際に経験したことはありませんが、このことをそのように思い定めていかねばなりません。

神のなさることは、我々人間には考えの及ばない神業なのです。生命の起源もそうです。母親の胎内で体がどのように創られて行くのかは人間には解りません。動かない花の種は土に埋めれば発芽して綺麗な花を咲かせます。神はその時必要に応じて天から雨を降させます。聖書は神の言葉です。我々は聖書の上に堅く立って御心通りに進みます。

神の御霊が自分のところに住んでいて下さり、御霊に導かれて生活するようになりました。

「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。」（コリ8:14）

我々クリスチャンは神をお父さんと呼ぶことが出来るのです。だから神は我々の避難所です。クリスチャンは神から「御霊の実」を頂いております。愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、忠実、柔和、自制です。これらの実はほどよく熟れて、香りを放つようになります。このような香りを漂わせるクリスチャンになりたいと思います。（畑中伸之）



苦しむ者が叫ぶと【主】は聞かれそのすべての苦難から救い出してください。【主】は心の打ち砕かれた者の近くにおられ霊の砕かれた者を救われる。正しい人には苦しみが多い。しかし【主】はそのすべてから救い出してください。」（詩篇34:17-19）

と云う法則、ダビデは誰にでも当てはまることとして学び、このように証ししている。私も幾多の苦難の中からこのような体験をし、苦しみの中から主に救われた者として、日々感謝しています。

そしてダビデのすすめは「主をおそれよ」（詩篇34:9）と云う一言、恐れると云う言葉は、主を主としてあがめ、信頼し、主である神様を自分の中で全能の神様として位置づけることとして、このように神をあがめて十字架上でのイエス様をいたい求める信仰をもって前に進みたい。ダビデにとって神様は「呼ぶと救って下さる」（詩篇34:6）方となっていました。

ダビデと神様の関係を知り、私はねたみ心を持つ。このように絶対的に信頼して下さる神に対してダビデも一生懸命、信仰によって答えている。祈りを通して神とダビデの深い愛の関係がわかるようになりました。主に感謝です。（畑中千恵子）

口は言った。私は自分の道に気をつけよう。私が舌で罪を犯さないように。口に口輪をはめておこう。悪しき者が私の前にいる間は。」（詩篇39:1）

「私たちは、舌で、主であり父であるお方をほめたたえ、同じ舌で、神の似姿に造られた人間を呪います」（ヤコブ3:9）

自分の人生を振り返って、問題と不幸の大部分を自分が造り出していたということがわかります。自分の口が語る否定的な言葉で、どれだけ後悔したことでしょうか。

しかしこれは心にあるから出るので、どれほど自分の心が主から離れているかを教えられる。

「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。」(箴言4:2)
この度、主日集会のロマ書の学びで、ヤコブ4章5節からとても励まされ、恵まれました。

新改訳2017年度版のヤコブ4章5節(神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる)が、原文では(神が、私たちのうちに住ませた御霊は、私たちをねたむほどに慕っておられる/ロイドジョンズ、山岸登訳)と訳されるべきなのだそうです。

私たちに對する神様の熱愛を思います。そして

「あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。」(ピリピ1:6)

主に癒やされ励まされました。(福島三弥子)



悪を行うものに腹を立てるな。不正を行うものにねたみを起こすな。」(詩篇37:1)

頭をがーんと割られるような言葉です。私は全く逆で腹を立て、ねたんでいます。そんなことに目を向けずに、主に信頼し善を行えと、詩人は続けています。

7節の主の前に静まり、堪え忍んで主を待て……と。まず主の前に静まることを、もっと大切に習慣にしたいと思うようになりました。

祈りたいのだけれど、言葉にまとめることができない時があります。こんな時は主の前に黙って座っているだけでもいいのではないかと、気づきました。言葉にならないうめき、言葉にまとめられない想いを、抱えて主の前にひざまずく、私の心を、憐れんで下さい。(広瀬裕子)

ヨハネの黙示録8～9章 七人の御使いが吹き鳴らすラッパによって、様々なわざわいが起こります。信じがたい数の人が殺され、また死を願っても死ねず苦痛に耐えるなど、想像するだけでも恐ろしくなります。

それにもまして、そのような恐ろしい目にあつたにもかかわらず、生き残った人たちが悔い改めなかったことに驚きます。

普通はこんな恐ろしい目にあつたことが悔い改めにつながると思うのですが。私のなかにもある、人が持つ頑なさや状況こそ違え、神さまの導きと助けなくして変わることはとても難しいことなんだと思いました。(栗原智恵子)

わがたましいよ なぜ おまえはうなだれているのか。なぜ 私のうちで思い乱れているのか。

神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の救い 私の神を。」(詩篇42:11)

この詩編の作者は「なぜうなだれているのか、なぜ思い乱れているのか」と自分に問いかけています。そして、「神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。」と自分に言い聞かせています。

この作者は礼拝ができず、周りからも「おまえの神はどこにいるのか」と言われて信仰生活に困難が生じている状況です。

そのような中で、自分の心が乱れていることを自覚し、現状の苦しさを神様に吐き出して訴えています。そしてなおのこと神様に寄り頼んでいます。苦しい状況では、見えない神様より見える自分の方に意識が向かって、助けも自分頼みになりがちです。

しかし、この詩編の作者も、ダビデも自分を頼りとせず主に訴え祈り続けました。「私は わが巖なる神に申し上げます。…(同42:9)」信仰の先輩と同様に、わが巖なる神と呼びかけられる信仰が与えられていることに感謝です。(永井亮子)

主によって 人の歩みは確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は転んでも 倒れ伏すことはない。主が その人の腕を支えておられるからだ。」(詩篇37:23-24)

ダビデは、自分が背負っている重荷を、いつも主に打ち明け、その都度、その重荷を下ろしました。そして、すべてを主にお任せしたのでした。

私たちの労苦は、一人一人別々に、違うものが与えられると思いますが、何度転んでも、その人の腕を支えてくださる主がおられます。私たちを守り、生かし、導いてくださる主に、素直に従って歩みたいと切に願います。(外處トミ)

神様の 御恵みの中 歩みゆく
か弱き我も 軽やかに立つ

2021年4月30日

これらのことを話していると、イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「平安があながただににあるように」と言われた。彼らはおびえて震え上がり、幽霊を見ているのだと思った。……「それから、イエスは聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた。」(ルカ24:36, 45)

イエス様が十字架で死なれた後、長く共に過ごしてきた弟子達でさえ、復活されたイエス様を見て幽霊と認識することしかできませんでした。

しかし、イエス様が弟子たちの心を開いた時に初めてイエス様が蘇られたことを認識することができ、喜びに満たされることができました。

信仰は啓示をいただくこと無しには何も得ることはできないことを改めて教えられますが、その啓示をいただけるに相応しい心砕かれた状態にあることも重要であることも示されました。

今も血に染まった衣を着て、父なる神様の右で私たちのためにとりなし続けて下さっている主イエス様を見上げてゆきたいと思いました。(外處徳昭)



群馬県富岡市の宮崎公園

十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」

そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」(ルカ23:39-43)

「強盗たちは最初、ふたりともイエスをののしっていました(このことは他の福音書からわかります/マタイ27:44、マルコ15:32)。「キリスト」なら、自分とおれたちを救え、と言ったのです。」

しかし、その後、ひとりの気持ちに変化が生じました。彼はもうひとりの強盗に向かって、その不遜なことばをたしなめました。

彼らは自分たちが犯した罪の罰を受けていたのです。それは当然の報いでした。しかし、真ん中の十字架についておられたお方は「悪いことを何もしていない」のです。

この強盗はイエスに向かって、「地上に御国を打ち立てるために戻って来られる時には、私を思い出してください」と主に願いました。これは驚くべき信仰です。

この死にかかっていた強盗は、イエスが死者の中からよみがえられ、やがてこの世界を治められることを信じていたのです。

イエスは、その日のうちとともに「パラダイス」にいますという約束をもって彼の信仰に報いられました。パラダイスは「第3の天」と同じで(Ⅱコリント12:2,4)、神の住まわれる場所を意味します。

「今日」とは何という早さでしょう。「わたしとともに」とは何とすばらしい交わりでしょう。

「パラダイスに」とは何という幸いでしょうか。聖書学者のW・マクドナルドは次のように述べています。

この話は、「救いは悔い改めと信仰が条件である」という真理を明らかにしている。けれども、この話には、他の重要な教えも含まれている。

救いは様々な儀式と無関係であることを告げている。この強盗はバプテスマを受けることも、主の晩餐にあずかることもなかった。……実際、彼は、敵意のある群衆の前で指導者や兵士たにあざけられ、からかわれながら、自分の信仰を大胆に告白しただけである。何の儀式も受けずに救われたのである。

この記事は、救いが善い行いによるのではないということの証拠でもある。……また、「魂の眠り」といったものがないことも示している。からだは「眠る」かもしれないが、意識は死後も存在するのである。

また、この記事は、煉獄(ローマ・カトリックで、人間が罪の償いを果たすまで靈魂が苦しみを受け、それによって浄化される所)などというものが存在しないことの証拠でもある。

罪と恥辱の人生を送った後に悔い改めたこの強盗は、ただちに至福のパラダイスの中へと迎え入れられた。

また、すべての人が救われるわけではないことも、この記事からわかる。強盗はふたりいたが、救われたのはひとりだけだった。

最後に覚えておきたいのは、死の向こう側にある喜びの本質は、キリストとの個人的な交わりにあるということである。

この死にかかっていた強盗に対する約束の核心は、「あなたはわたしとともにいます」ということばにあった。これこそ私たちの幸いな確信である。この世を去るとは「キリストとともにいること」であり、そのほうが「はるかにまさっている」のである(ピリピ1:23)

十字架上にあって悔い改めたひとりの強盗は何とすばらしい救いの約束を受けたことでしょう。何の善い行いもない者をも救ってくださる救いの福音の真理をありがたく思います。十字架で、私たちの身代わりとなってくださった主に感謝と賛美をおささげしましょう。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。

次回はマナ5月号の感想を6月10日頃までに福島兄弟へお寄せ下さい。(永井)

